

# 平成 27 年度作文コンクール

安全振興会では、生徒の皆さんの安全意識の高揚を図るために、「安全」又は「健康」をテーマに作文コンクールを実施しています。今年度も素晴らしい作品が607編も寄せられました。吉岡謙二郎委員長、王尾富美子副委員長、桐野輝久、萬俵好明、宮代哲彦、萩元幸治委員の6人の元校長先生に審査をお願いしました。最終選考会議では、最優秀2編、優秀7編、佳作22編が決定されました。この中から最優秀に選考された作品を掲載しました。

## 最優秀賞

### 日常の中に

県立多摩高等学校 一年

高品 日苗

「お嬢さん、すみません。駅はどちらでしょうか。」  
学校からの帰り道、背後から声を掛けられた。振り返ると、そこには杖を持った二人の年配の男性が立っていた。一瞬、声を掛けられたのが自分かどうか迷ったが、どうやら私のことらしい。丁度駅に向かっていた私と二人は、二人を案内することにした。おじいさん達は礼を言おうと私と一緒に、ゆっくりゆっくり駅までの道を進み始めた。道端に咲いている花や、手入れの行き届いた木を見つけては足を止めて私に熱心に説明してくれる。最初は一つ一つにあいづちを打っていた私も、なかなか着かない駅までの道のりにだんだんと言葉少なになんていった。早く学校を出たはずの私を次々と友達を追いついて行く。去って行く友達の背中を眺めながら、私は曖昧な返事を繰り返していた。

「お嬢さん、こんな話を聞いてもつまらないでしょう。」  
「あ、いえ。」

とっさに私はそう答えたが、おじいさんは私が話に興味をなくしていることを見抜いていたのだろう。そう思うと、私は急に申し訳ない気持ちになった。  
駅に続く歩道橋まで来ると、二人はまた一段ずつ時間をかけて上っていった。いつも私が駆け上がる階段だ。剥けて赤くなった手すり、ところどころさびた金属部分、毎日見ているはずなのに、今、気が付いた。私は今まで何を覚えてきたというのだろう。

最後の一段、歩道橋の頂上で待ち構えていたのは紅色の夕焼けだった。夕焼けは、住宅地を包み込み、花や樹木を包み込み、階段の一段一段を包み込んでいく。

「私達へのごほうびですな。」

そう言って笑っている私達のこと、夕焼けは包み込んでいった。つぼみが花を開くように、ゆっくりと日が沈むように、時間の流れに合わせて物事は変化していく。とどまることもない。変化は必ず生じるものである。毎日の何気ない通学路の中にも変化は隠れている。おじいさん達が私に教えてくれたように、変化に気付くにはきちんと日常に向き合うことが大切だ。日常とは、いつもの友達やいつもの風景のことではない。変わり続けるその姿のことである。自分の考えは、時に日常の表情の変化に影響を受けることがある。毎日の何でもない生活を丁寧にみつめていくことが、壮大な自然や大きな夢に近づく第一歩のはずだ。

今日もきつと、素晴らしいかけがえのない一日なのだ。そんなことを感じるのも、二人のおじいさんとの出会いがあったからかもしれない。

## 最優秀賞

### 本当のバリアフリーとは何か

県立相模原中央支援学校 高等部二年

糸数 夢乃

「バリアフリー」という言葉は聞いたことがあると思います。しかし、この言葉の「日常生活や社会的、心理的な障害に関わる障壁を取り除く」という意味を知っている人は少ないのではないのでしょうか。確かに、駅やスーパーなどの公共機関の施設内はバリアフリー化されていますが、自力でその施設に行く道のりは困難の連続です。

道に二センチほどの段差があると、タイヤが引っ掛かってしまい、乗り上げて越えるのに時間がかかってしまうことがあります。回り道をしなければならぬこともあります。斜めになっている道では、傾斜がついている方に車輪が引っ張られて、道からはずれそうになるなどの大変さがあります。

外には、なかなか気付いてもらえないバリアがあるので、日常の障壁を無くしているとは言いがたいのが現状です。しかし、段差があるからといって全ての段差をすぐに無くすることができないのも事実です。

段差を乗り越えられない時や、ドアが開けられなくて困っている時に「大丈夫ですか。」と声をかけてもらうことがあります。

「そんなに焦らなくても大丈夫だよ。」

と声をかけてくれました。乗車していた人たちも乗り込みやすいように周りを空けてくれました。そこで優しさや親切心に触れることができたのです。心のバリアフリーは私が思っていたより身近にあるものだと感じることができて良かったです。

最近、私はバリアフリーという言葉には二つの側面があることに気が付き始めています。

物理的バリアフリーには道の整備ができていないことなど、まだまだ危険性をはらんでいて、改善していくべき点がたくさんあります。心理的なバリアフリーとは助け合いの精神だと感じています。人は誰もが一人で生きてはいけません、その中でも多くの人に助けられることが多い私は、相手の優しさに触れる度に感謝しながら毎日を送っています。

この二つのバリアフリーが同時に存在しているからこそ、一方が不十分で理想的なものでなくとも、もう一方が補って、人にしてもらった行為に対して、よりありがたみを知ることにつながるのだと気が付きました。

改めて、いつも私を支えてくださる人たちに感謝の気持ちを伝えようと思います。社会に出ていく時も、この感謝を多くの人に伝えていくようにになりたいと思っています。